

第8話 皇威の振興

しどう はけん みまな ほご みまな
四道將軍の派遣、朝鮮の任那を保護国として日本の役所を任那に置いた。

さて、御鏡と御剣とを笠縫邑に遷して、そのお祭りの事を全て皇女にお任せしてしまうと、
崇神天皇は専ら御心を人々の事に注がれた。天皇の御代の頃は、すでに建国の時から数百年を経て
いたので、皇室の威光は大和から次第に四方に及び、畿内の近国はよく治まっていたが、何しろ交通の
便の悪い世の事でしたから、都から遠い地方になると、どうしてもお政治が行き届きません。

そのために、悪者などが横行して良民を虐げているところもありました。

しどう はけん 四道將軍の派遣

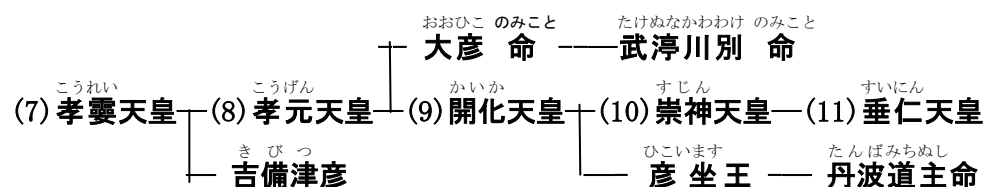
同じ日本のうちに住んでいながら、そういう不幸な目に遭っている者もいるという事を崇神天皇が
お聞きになると、哀れな事に思召して、或る日、臣下をお集めになって仰せられた。

「民を導く本は、教えて道を知らせるにある。今、すでに神々を祀って禍は皆無くなったが、
遠い国の者どもは、未だ平和の喜びという事を知らずに、互いに戦って、殺しあっている者もいると
のことである。これは教えが到らぬからであろう。そして今、人を選んで、四方に分ち遣わして、
私の心を知らせようと思う」と。

すなわ おおひこのみこと たけぬなかわわけのみこと きびつひこ たんばみちぬしのみこと
即ち、大彦命を北陸道に、武渟川別命を東海道に、吉備津彦を山陽道に、丹波道主命を
山陰道に派遣になることとして、「もし教えを受けない者があれば、乃ち兵を挙げてこれを伐て」と仰
せられて、特に印綬を授けて將軍となされた。これを四道將軍といいます。

これらの將軍は、官吏がただ地方を巡回するのは違って、永くその方面の開拓や殖民を受け持
たれたのでした。すなわち、前から住んでいる人々をなつて、悪者はこれを平らげて、朝廷のご恩を
広く一般に教え知らせると共に、荒れたまゝになっている野山や草原を開墾して田畑としたり、都
から率いて行った部下の者をその土地々に住みつかして村里を拓いたりするのでした。

いわば天皇の代わりになって、直ちにその地方々々を治める役人でもあったので、その責任は中々
重いのです。そして天皇は、遠い未開の地方へご派遣になるのだというのに、特に皇族の中で最も
勢力のある方々を選ばれた。すなわち、大彦命は孝元天皇の皇子で、崇神天皇の皇后の父君であ
り、武渟川別命は大彦命の子、吉備津彦は孝靈天皇の皇子、丹波道主命は開化天皇のお孫で、
彦坐王の子でした。これを系図にして示すと次の通りです。



さて、四道將軍は天皇の命を奉じて、各地を巡回したが、その中で、東海道へ赴いた武渟川別命

第8話 皇威の振興

はだんだん奥へ進んでいくうちに、北陸から来た父の大彦^{おおひこ} 命^{のみこと} と偶然にも陸奥^{ぐうぜん}（今の岩代^{みちのく}）で出会いました。それで、その地を会津^{あいづ}（福島県）と呼んだ。この一事を見ても、いかにこの將軍達が遠くまで進んで行ったかが分かります。

弓弭^{ゆはず}の調^{みつぎ}と手末^{たなすえ}の調^{みつぎ}

斯うして朝廷の威光^{いこう}が遠くまで行き届いて、おいおい四方^{ひら}が開けていくと、国家の費用もだんだんと多くなって来た。それで、初めて民の数を調べて、男には弓弭^{ゆはず}の調^{みつぎ} といって、獵^{りよう}で得た獸^{けもの}の皮や角などを納めさせ、女には手末^{たなすえ}の調^{みつぎ} といって、手で造った織物などを納めさせました。

これは、国家が民を保護して民が安心して暮らせるようにする代わりに、その費用を納めさせるものであり、即ち今日の租税・税金です。これを納めるようになると共に、今まで統一のつかなかった全国^{ぜんこく}の民が、誰も彼も等しく天皇の民だということを知るようになったので、君と民の間も一層親しくなり、人々同士も互いに親しみ合うようになりました。

天皇はまた、船を造らせて交通の便をはかり、殊に農業^{のうぎよう}は国の大本であると仰せられて、諸国に池を掘り、溝を開かせるなどをして、大いに農業をお勧め^{すすめ}になったので、どこもかしこも勢い^{いきお}がよくなって、後には人々は皆富んで、楽しくその日を暮らすようになりました。これを、ご即位の始めに伝染病が大いに流行って、世の中が物騒^{ぶつそう}を極めた頃と比べると、その違いはどんなにあったでしょう。人々が皆天皇のご恩を感じて、いよいよ仰ぎ尊^{あお}んだのは言うまでも無い事でした。

任那^{みまな}の日本府^{にほんふ}

その頃、今の朝鮮の南部に任那^{みまな}という小さな国があったが、その東北の新羅^{しらぎ}という国のために常に侵略されて困っていた。任那は、この日本に偉い天皇^{みまな}があって、国もよく治まり兵も強いということ^{えら}を伝え聞いて、はるばると使いを寄越してわが国の保護を請いました。

それでよく調べてみると、いかにも新羅が無理で、強いに任せて弱い者虐めをしている事が分かったので、天皇は塩乗津彦^{しおのりつひこ} という將軍を遣わして任那を援けられ、その為^{ため}に日本の役所を任那に置かれた。即ち任那の日本府の起こりでして、これが、後の神功皇后の時代に、日本が朝鮮半島に次第に発展する足場の一つともなったのであります。

（第8話 皇威^{こうい}の振興^{しんこう} 終わり。 次は前頁に戻り、第9話 日本武尊^{やもとたける}の西伐東征^{のみこと せいばつとうせい}へ）